音無しく好きして

※体験版※

義勇に抱きつぶされたあと、四、五日ほど任務で訪れられないと言われてから、炭治郎は自分の身体の覚悟をしていた。
だから義勇はあれだけ激しく炭治郎を抱いたのだろうか。五日分の交わい、ということだったのだろうか。
義勇さんがしてくれたのなら、明日は症状が治まっているかもしれない。
そう楽観的に考えて、炭治郎は眠りについた。

次の日になったが、療養所の様子はいつもと変わらず、伊之助が大人しくて善逸がうるさい。
しかし、炭治郎の身体に異変があった。
義勇に抱きつぶされてベッドに入ってそのまま眠ったが、目が覚めてしばらくすると身体の中の疼熱が再び暴れ出していたのだ。

（そんな、なんのために義勇さんがしてくれたと・・・）

しかし炭治郎の意思とは無関係に、身体の芯で疼き続ける熱は炭治郎の覚醒がはっきりすると共に激しくなり、再び布が擦れるだけで感じてしまう身体になってしまった。
炭治郎の身体の熱を収めるために身を任せたと言うのに、度重なる快感を身体が覚え込んで、貪欲に愉悦を欲するようになっている。

（ううっ・・・・）

善逸や伊之助がいる部屋で、真昼間から淫欲に狂うなど、自分の身体と心は本当にどうかしている。

（この程度で・・・我慢しないと・・・）

動くとシーツに身体が擦れるので、炭治郎は仰向けでベッドに沈んだまま、微動だにできない。

「たんじろおー！今日も薬が不味いよー！」

毎日の善逸のけたたましい嘆きが聞こえてくる。

（善逸は本当に善逸らしいな）

常なら辟易する場面だが、善逸の滑稽さが炭治郎の心を温かくしてくれる。心なしか、少し疼熱が治まったような気がした。

（こんなことばっかり考えているから、余計なことを考えるんだ）

そう思いたち炭治郎は起き上がって、ベッドから降りた。身体は決して万全ではないが、少し無理をすれば日常生活に支障がないほどには動ける。

「俺、これから走ってくる」

「え？何急に？もうすぐ昼餉だよ？」

「それまでに戻ってくるよ」

善逸の言葉を背中で聞き、炭治郎は廊下に出た。服が肌に擦れるとぞくりとするが、考えないようにする。うおーっと雄叫びを上げながら庭を駆け巡ったが、アオイにうるさいと注意され、小半刻も運動はできなかった。

※中略※

見知らぬ隊員に思いを馳せているが、身体の芯を揺さぶる淫欲の熱はどんどん高まり、再び体中に甘い痺れを感じるようになって、ベッドの上で身体をくねらせる。

しかしその直後、不意に背を向けた方向から何者かが体重を掛けてくる気配を感じ、炭治郎は首を巡らせてその人物を見た。

「善逸・・・」

頼りない月明かりに照らされたのは、善逸の金髪と、半眼に開かれた金の目である。

「どうしたんだ？眠れないのか？」

「・・・眠れないのはおまえだろう？」

「えっ」

図星を指されて、炭治郎の胸が跳ね上がる。しかし善逸は炭治郎の返事を待たず、そのまま炭治郎のベッドの中へ入り込んできた。

「な、なんだどうしたんだ善逸・・・！」

人肌を近くに感じて余計に身体が熱くなり、炭治郎は少し大きな声を出して熱を誤魔化す。しかし、いつの間にか仰臥した炭治郎の上にのしかかった善逸が、炭治郎の口を塞いで囁いた。

「おっきい声をあげると、伊之助が起きるよ」

「・・・・・・」

もっともなことを言われて炭治郎は黙ったが、一日ぶりの人肌の温もりで、身体は完全に発情状態になってしまっていた。口を塞がれているので鼻で息をするが、その息すら、性的な興奮に乱れたものになってしまう。

「冨岡・・・義勇って、誰？」

突然予想外の質問をされ、何故善逸がそんなことを知っているのかと言う疑問も湧いたが、瞬間的に義勇の男らしい掌の感触を体中に思い起こして身体を愉悦で震わせた。

「なんで・・・知って・・・」

吐息混じりになりそうな声をなんとか抑え、炭治郎は善逸に問う。すると善逸はため息をついて、炭治郎の顔の両側に手をついて、真正面から炭治郎の顔を見据えながら言った。

「俺の耳、すごくいい事知ってるだろ？」

「・・・・・・」

「お前がここに来てから、毎晩スケベな声で喘いでるのずっと聞いてた。それから、冨岡って人に・・・抱かれているのも知ってる」

善逸が言う言葉は全て真実だ。少し据わったいつもと違う善逸の目線から逃れるように目を泳がせながら、炭治郎は何も言えない。

いつもだらしなくて泣きごとばかり言っている善逸と、今夜の善逸は違う。こんな善逸は初めてだ。真面目で、なんだか少し怖い。
熱に浮かされた炭治郎の鼻に、怒った匂いとそれとは違う、複雑な香りがする。義勇からも同じ香りを感じることがあるが、炭治郎にはその気持ちの正体が今でもわからない。
それよりも、蝶屋敷に来てからずっと夜中、炭治郎が疼熱で煩悶していたことが知られていたことを、炭治郎は改めてとんでもなく恥ずかしく感じた。

「あの、それは・・・」

嘘が付けない炭治郎は、なんと言ったらいいのかわからない。
全部話そうか。しかし、それをしてしまったら、蔑まれてせっかくできた友達が、去ってしまうかもしれない。

「俺のいびきがうるさいの知ってるでしょ？ずっと聞こえてなかったの不思議に感じなかった？」

もしや、善逸は自分が夜、淫猥な思いに囚われて身悶える音をずっと聞いていたのだろうか。あまりにも突然突き付けられた事実に、炭治郎の頭が付いてこない。

「ほんと、横でたまらないんだよね・・・」

炭治郎が何か言わねばと思い悩んでいる瞬間、両頬に手を添えられて軽く口づけをされた。
義勇のように舌を入れる情熱的な接吻ではなかったが、性感帯になってしまった唇への刺激は、極限まで欲情が高まった炭治郎には猛毒だった。
昼間は日の光を照らして煌めく炭治郎の清廉な赤銅の瞳に、情欲の手が伸びてくる。

「ぜん・・・いつ・・・」

再び口づけをされたが、両頬を掴まれているから逃れることができない。その前に、突然の口づけで脳天から首筋までに甘い痺れが走り、身体の芯が一気に熱を帯びてくる。
少し開いた炭治郎の唇に善逸の舌が差し込まれ、少し遠慮がちに口腔を撫で回す。義勇の技巧には敵わないが、その不慣れな仕草が、余計に炭治郎を欲情させた。
唇を離され、熱っぽい吐息に、善逸がさらに大胆な行動をとってくる。療養着のボタンに手をかけ、炭治郎を脱がせにかかってきたのだ。
流石に焦って炭治郎は善逸の両手首を掴んで止めようとしたが、その手には力は全く入らない。

「善逸、どうかしてる、だめだ、こんなの・・・！」

一気に開かれた上半身に、夜の涼しさが感じられてそれだけで感じてしまう。自分の身体は浅ましいことになっているのかもしれない。それを無二の親友である善逸に見られる羞恥で、炭治郎は泣きそうになった。

「お前、これ、どうしたの・・・？」

少し呆然とした善逸の言葉の意味が分からず、炭治郎は当惑する。
上半身の鎖骨や肩口、脇腹に指を這わされて、声が出そうになって炭治郎は必死にシーツを噛む。

「感じるんだ・・・その、冨岡ってヤツに全部やられたの？」

（なんでそこで義勇さんの名前が出てくるんだ）

炭治郎は疑問に思いながら、もう善逸に義勇のことを追及されたくなかった。
炭治郎は自分の身体の状態を知らないが、その若い身体には妖者たちに刻まれた凌辱の後が色濃く残っている。血が出るほど食い込まされた噛み跡や、痛みにすり替わるギリギリまで吸い上げられた接吻跡、それらが炭治郎の身体に無数に点在し、見る者を驚かせずにはいられない。

「山から帰ってきて、お前何されたんだよ・・・炭治郎」

その善逸の声には炭治郎を心配する響きと、今にも泣きだしそうな匂いが鼻孔をくすぐった。

「俺は・・・」

ここまで知ってしまった善逸に黙っていられず、炭治郎は口を開こうとしたが、再び善逸に口づけされて言葉を塞がれた。
頭の奥がとろ・・・と蕩ける感覚がして、手足に力が入らない。体中から妖しい淫熱を発し、炭治郎の身体も欲情の限界だった。

「これから・・・するよ・・・炭治郎・・・」

耳元で囁かれ、炭治郎は首筋に走る甘い痺れに逆らうことができない。親友の善逸とこんな事態になってしまって、炭治郎はこれから取り返しがつかない行為に及ぼうとしている。しかし情けなくも自分の身体は熱に浮かされて、善逸の肌の感触を欲して堪らなくなる。

善逸から、例の匂いが一気に強くなる。義勇が自分を抱くときに感じる、獣のような甘いような、興奮しきった汗の匂い。善逸の匂い。

「ぜ、善逸・・・伊之助が、起きる・・・」

半分熱に浮かされながらそれでもなんとか善逸の行動を止めようとするが、自分の鎖骨に唇を落としながら、善逸は無感情な声で言った。

「伊之助は寝てる。音でわかる」

いつになく真剣な声色に普段の善逸ではない変化を感じ、炭治郎の心に少し怖気が走る。しかし、それを覆ってあまりある情欲が、炭治郎に思考させることを許さなかった。

「んんっ・・・そこ、触るな・・・！」

善逸の唇が桜色に落ち、ビリビリとするほど敏感になった身体がシーツの上で妖艶に身悶える。
こんな姿を見せられて興奮しない男はいない。炭治郎が嫌がるのも無視して、善逸は桜色を口に含み、舌で転がして感じさせ始めた。

※中略※

「んんっ！は、はぁ、あぁっ！あっ！ん、んんんっ！・・・んーっ！んんんっ！」

すぐに手を離しそうになる炭治郎の手を上から押さえつけて、善逸は必死に腰を振っている。炭治郎は相当感じているらしく、すぐに先走りの淫液をこぼして、闇夜に淫らな水音が響いている。
善逸はまだ時間がかかりそうだというのに、炭治郎はすぐにでも吐精しそうな感じようで、自分が炭治郎をここまで乱しているのだと思うと加虐の快感が湧き上がってくる。
声を出すのが恥ずかしいのか、すぐにシーツを噛んで抑えようとするので、その度に善逸は口を開かせて口づけをする。
炭治郎の口の中は暖かくて、蕩けそうで甘かった。
口吸いなどしたことがなかった善逸だが、本能のままに動くことで炭治郎が大きく身体を震わせるので、これで正解なのだと、実践しながら性技を覚えてゆく。
いつもはぱっちり開かれた穢れない大きな赤い瞳に涙を溜め、恥ずかしそうに伏せられる表情を見せられて、善逸は理性が焼き切れそうなほどの欲情を感じてしまう。
自分の身体が万全であれば、冨岡と言う男に変わって炭治郎を抱けると言うのに、ままならない自分の身体が恨めしい。

「あっく・・・！善、いっっ・・・今は、もうちょっとゆっくり・・・」

（イきそうなんだ）

炭治郎の雛先が震え、熱い淫液が互いを濡らして止まらない。善逸が達するにはまだ時間がかかりそうなのに、随分感じやすいな、と思うが、善逸は炭治郎のいう事を無視して逆に腰の動きを速めてやる。

「あぁっぁぁっ・・・！やめ、んんっ、で、出るっ・・・！あぁ・・・っ！」

互いを握る炭治郎の両手が急に絞められ、善逸は急な圧迫感に驚いたが、炭治郎の腰が痙攣すると、雛先から勢いよく白液が吐き出され、炭治郎が艶声を上げて達していた。
吐き出された白液は炭治郎の腹筋に落ち、筋肉の筋を伝ってシーツを濡らしてゆく。

（あ、やば・・・シーツが濡れるとバレるかも・・・）

まだ絶頂には遠く、辛うじて冷静に頭が回る善逸は、自分の服の裾で白液をぬぐってやる。終わった後に自分で洗おう、などと呑気な事を考えていたが、絶頂したばかりの炭治郎を見て善逸は息を詰まらせた。

（めちゃくちゃ可愛い）

いつも後ろに撫でつけている前髪がほつれて額に垂れ、いつもの炭治郎と少し違う風貌になっている。それだけでも胸が高鳴るのに、絶頂を迎えたばかりの表情は紅潮し、綺麗に配置された目や鼻、口を悩ましく気にゆがめて薄く色づいた唇から熱い吐息をせわしなく吐いている。瞬きを繰り返す赤銅色の瞳には涙がたまり、儚ない美しさがあった。

炭治郎をこんなに色っぽいと思ったことはない。淡い月明かりに照らされて、未成熟だが鍛え上げられた身体の隆起を陰影が辿り、達精した快楽に肌が酔いしれている。

炭治郎の心音は未だに大きかったが、欲を満たせたことで充足感を感じていることを善逸は聞き取った。

「はあ、はぁ・・・ごめん・・・先に・・・」

相手の我儘に付き合っているだけだと言うのに、炭治郎はどこまでも真面目で真摯だ。その淫らなかすれ声も、絶頂の余韻で快楽に乱れた顔も、善逸の獣欲をそそらずにはいられない。

「炭治郎、ごめん、俺まだなんだ・・・」

善逸の言葉を聞いて一瞬理解していないようだったが、腰を動かされて極めたばかりの鋭敏な雛先を擦られ、炭治郎が腰を痙攣させて両手を離す。

「んんっ！今は、そこが・・・なんだか、敏感・・・になってて・・・ごめん善逸、触られるのも、辛いんだ」

そう言って拒絶され、善逸は頭に血が上った。ここまで自分を煽っておいて、自分だけ気持ちよくなって相手には止まれという。

「とんでもねえ炭治郎だよ、ほんと」

そう言うと、善逸は先ほどよりも激しい腰遣いで炭治郎を責めた。

「あぁっ！あっ！だ、だめ、変、変なんだ・・・！」

炭治郎は恐らく性の快感になれていない。その炭治郎に快楽を教え込んでゆくのは善逸にとって総毛だつほどの愉悦で、これからどんどん教え込んでゆこうと思う。

冨岡義勇などという会ったこともない人物に恪気を起こしていたが、今炭治郎を支配しているのは自分だ。

ほの明かりに照らされた炭治郎の裸の身体を撫で回すと、顕著に肌を震わせる。気持ちいいのに苦悶しているような顔が善逸の情欲をそそり、再び暴力的な口づけをしてしまう。
ん、ん、と鼻声を出しながら、善逸の舌に応えてくる炭治郎がたまらなく愛らしい。
互いの粘液で潤った下半身は、さらに滑りが良くなって善逸にさらに強い快感を与えてくるが、それは炭治郎も同じらしい。一度吐精して力を失くした雛先が再び反応し、また絶頂へと昇り詰めようと腰を震わせている。

「あっ・・・あぁ、善逸っ・・・も・・・また・・・」

「また気持ちよくなっちゃうの？俺まだなんだけれど」

「すまない・・・もうちょっとゆっくりしてくれたら・・・」

涙を目に溜めた上目遣いで言われて、ゆっくりなどしてやれない。善逸はさらに激しく腰を振り、屹立同士を擦り続ける。

「んんっ！だ、だめ、善逸！ほんとうに！あぁあっ！」

炭治郎はすでに両手を離し、シーツを掴んで快楽に耐えているだけだ。眉間に皺を寄せて、いつもは零れそうに丸い瞳を閉じて、顔を朱くして喘ぐ炭治郎が凄く可愛い。色っぽい。
下半身に熱がたまってくる。ここに来てから自慰はしたが、出るのは精の入っていない透明の液体だけだが、絶頂感はある。最初は茫然としたが、蜘蛛の毒が抜けて身体の大きさも戻れば、ここも元のように機能するだろう。いや、そうでなくては心底困る。男として重大事件だし、なにより、ちゃんとした身体で炭治郎を抱きたい。
兜合わせなんて手段じゃなく、中に入って犯したい。
炭治郎に対してますます獣欲が沸き、善逸は目前の艶やかな顔を見ながら、自分の興奮がどんどん高まっていくのを感じた。

「ごめん！炭治郎・・・！」

意を決したように叫ぶと、善逸は腰を引いて炭治郎の大腿を鷲掴み、体勢を大きく変化させた。

「ぜ、善逸？」

驚く炭治郎に構わず善逸は炭治郎の股座のぬめりを指にとると、指を一本秘孔に挿し入れた。

「うっ・・・・!」

炭治郎の腰が一回跳ね上がり、善逸の小さくなった指を受け入れて反応する。男の指と言うにはかなり頼りなく、圧迫感はほとんどないが、異物感はある。その感覚は、ここまでの兜合わせでぐずぐずに滾りはじめた中を刺激し、たったこれだけで身体が震えるほどの快感が湧き上がる。

(やっぱりここ気持ちいいんだ)

中に指を挿れてから炭治郎の表情をみると、さっきより明らかに色香が増している。さらに荒くなりそうな息を我慢して目をつぶり、腰から上をヒクヒクと痙攣させている。快楽を我慢しているのだろうが、その熱が余計に身体の中で籠って、吐き出される色が濃くなってしまっている。

(た、堪らない、腰が蕩けそうだ・・・)

これまで焦らしに焦らされた中に指を挿入され、性感神経の密集した部分が歓喜に沸く。その刺激はとても炭治郎の欲望を全て満足させられるほど強力ではなかったが、それでも刺激されると涙がこみ上げてくるほど感じてしまう。

子供のように小さな手になってしまった善逸の指では、炭治郎の中の最も弱い性感帯には届かない。しかし、そのじれったさが身体をさらに燃え上がらせ、炭治郎の意識を快楽で染めてゆく。

「あっ・・・うぅっ・・・・!」

指の数が増やされ、洞内の圧迫が強くなる。それでも物足りないと身体は悲鳴を上げるが、それだけでも意識がかすむほど気持ちが良い。

（炭治郎のここ、柔らかい・・・やっぱり昨日、冨岡って人としたからかな・・・）

男同士で同衾する場合は、受け手はある程度準備をして柔らかくしていないと男の魔羅を受け入れられない。しかし、すでに受け入れられるほど柔らかくなっている炭治郎のここは、昨晩、翌日になっても柔らかいままになるほど致されたということだ。

（なに炭治郎の身体貪っちゃってんの）

見知らぬ男に悋気を起こしながら、善逸は指を引き抜き、炭治郎の秘孔に自分の稚拙になった屹立を押し当てた。

「うあっ・・・!だめだ、善逸、やめろ、後悔する・・・!」

「後悔しないよ。だから大人しくしてよ」

ギラついた眼差しで真正面から声を掛けられるが、炭治郎の身体と意識はそんな善逸に危険を感じられるほど正常ではなくなっていた。
早くほしい、頭が白くなるほどの強烈な快感が欲しい。茹った炭治郎の身体は、すでに男を受け入れたくてざわめき続けている。

「んんっ・・・!」

善逸が腰を進めるのと、互いの吐息がまじりあい、清廉な療養所の部屋でこのベッドの上だけ淫靡な空気が濃く漂っている。内に挿る快感で善逸の口からため息が漏れ、炭治郎も身体の中で満たされる快楽に熱い息を吐く。
善逸には申し訳ないが、義勇や妖者たちとのそれに比べればまだまだ足りない。今の善逸の屹立の大きさは、大人の指三本分ほどの長さと太さしかないが、先端が中の性感帯に当たって、押しつぶされる感覚に腰が砕けそうになる。

もっと奥深くまで入って乱して欲しい欲求がせり上がるが、そう思っている自分に気づいて、炭治郎は己を恥じた。

（快感に流されるな、しっかりしろ、炭治郎！）

自らを鼓舞するよう叱咤するが、中で存在する善逸は、物足りないながら焼き鏝のように熱く、じんじんと炭治郎の中を灼いてゆく。

「んっ・・・動くよ・・・」

善逸の艶っぽい声に胸を一瞬ときめかせ、直後、引き抜かれる快感が襲い、炭治郎は我慢できず声を上げた。

「あぁぁぁあっ・・・！」

身体中を痙攣させる炭治郎の身体を抱きしめ、善逸が優しく口づけをしてくる。
その柔らかな物腰に陶酔しそうで、炭治郎も自ら挿りこんできた舌に己の舌を絡めた。
「炭治郎の中、凄く熱い・・・とろとろで、柔らかいのに・・・締め付けてきて・・・」

※中略※

言いかけた言葉をさえぎられて、炭治郎が押さえに来た善逸の手を掴む。

「伊之助、まだ起きてる」

「・・・・・・・・・・」

善逸と炭治郎は、掛布団の中に頭までもぐりこみ、向かい合ってコソコソと会話し始めた。

（善逸から、また例の匂いがしてる・・・これ、いやらしい匂いだなあ）

そう思って嫌悪しかけたが、義勇もこれとそっくりな匂いを出すことを思い出し、炭治郎は見えぬ兄弟子に対して少し悪く思ってしまう。

真っ暗がりの布団の中で、頬に生暖かい濡れた感触があった。平素ならば気持ち悪く感じるところだが、全身性感帯と言ってよいほど敏感になってしまっている炭治郎の身体は、それを快感に変換して性感神経を熱くさせる。
その濡れた感触は何度も炭治郎の顔を移動して頬や顎を撫でていたが、唇にかかってようやく止まった。
そして、口腔に入り込んでくるのは完全に舌だ。

「んっ・・・ぐっ・・・・・!」

ジンジンと熱を持った唇を善逸の唇に重ねられ、舌で性感帯の口の中をまさぐられ、それだけで炭治郎の頭は真っ白になる。
逃げられないように善逸の手が後頭部に回されるが、ヒクヒクと痙攣するだけで反抗する様子はない。
ぷは、と互いに口を離すと、布団の中で籠った熱気が広がり、善逸は掛布団を少し開いて換気する。

（熱い匂い・・・クラクラする・・・）

早くも淫気に当てられた炭治郎は、もう身体が痺れて動かなくなってしまっている。

自分の欲望に忠実になればいいのに、素直になれない。自分が望んでこのような身体になってしまったことを今でも悔しく思っているし、何故遠慮が生じるのかわからないが、こんなことを他人としてしまって義勇に申し訳なく思ってしまう。

「善逸、ほんとうにだめだ・・・こ、こんな・・・」

布団のなかで小さな声で炭治郎は言うが、善逸には心音で欲情は筒抜けだし、言う言葉にも力がない。

「こんな？」

「ふ、ふしらだな・・・こと・・・」

消え入りそうな声で炭治郎が言うのをたまらなく可愛く思い、善逸はたまらず炭治郎の身体を抱きしめて唇を付けた。
さきほどの位置を確かめるような口づけではなく、明確に獣欲を持った接吻だった。口から炭治郎を食べようとでもしているかのように舌の動きも、唇の動ぎも激しい。

「んふっ・・・んっ、んっ・・・！」

善逸の舌が唇を舐め、首筋にかかるときには、療養着のボタンをはずされ、鎖骨に口づけを降らせる。

「っ・・・・・!」

炭治郎の身体がピクピクと痙攣するのが可愛らしい。本当に嫌だったら、ベッドから自分を突き飛ばすなり殴るなりすればいいというのに、炭治郎は善逸にされるがままだ。これで「やめろ」などと、どの口がいうのか。

「んっんっ・・・そこ、だめっ・・・・!」

暗がりの中で善逸の指に硬くとがった部分を探り当てる。もう片方にもあるはずだと、掌で肌を這わせて触ると、やはりたどり着いた。
昨日ここの刺激だけで絶頂した炭治郎が、発情してここを疼かせていないわけはない。善逸は暗がりの中、手探りで自分の思いつく限りの手指の動きを仕掛けてみる。
人差し指と親指に挟んで上下擦ると、炭治郎の背中が急に反り返って、こちらが一瞬驚愕した。しかし、口を押える炭治郎の手の隙間から泣きそうな声で「だめ」と聞こえてくると、善逸の理性は引きちぎられそうになった。

もう片方にも同じ仕草で愛撫をすると、最初程大きな動きは見せなかったが、感触が二つになったことで相当感じているらしく、手で塞いだ口から荒い吐息が漏れまくっている。
指先で上から桜色を押し付け、捏ね回すような動きをすると、堪らなかったようで、炭治郎はとうとう声を上げてしまう。

「うぁっ・・・！」

伊之助が気づかないように布団をかぶったのに、これでは聞こえてしまうのではないかと思われる声量だった。しかし善逸は止めない。
布団のなかは、炭治郎と善逸の淫熱の空気で籠り、むせ返るほど暑くなってきている。善逸は再び布団を上げて空気の入れ替えをしたが、その瞬間、差し込んだ月光の下で炭治郎の顔が見えてしまった。
両手で口元を必死に塞ぎ、両目を閉じて涙を睫毛に絡め、紅潮した顔に、眉毛を下げて、日頃上げている前髪がほつれて額にかかっている。
その姿に善逸は今度こそ理性の糸が切れる音を聞き、そのまま炭治郎の身体の上にのしかかった。

「ぜんっ・・・！」

炭治郎の両手を無理矢理左右に開き、ベッドの上に縫い留めて無理矢理口づけをする。口づけというよりも、唇から炭治郎を食べてしまうような勢いだった。
獣のように舌を激しく動かし、口腔とも頬とも顎とも言わず、とにかく舐めまわす。

「っ・・・・・!」

両手を抑えられている炭治郎が、必死に無音で耐えるのが、余計に善逸の熱を注ぐ。平素の炭治郎ならば、未成熟になってしまった自分の手など簡単に振りほどけるだろうに、それをしないことにも善逸の欲情に拍車をかける。

鎖骨を通って胸にたどり着き、さきほど指で散々弄んだ突起に舌で触れ、口で吸い上げながらめちゃくちゃに舐めまわす。

「ぁあっ・・・!だ、め・・・ほんと、ぜん・・・いつ・・・!」

炭治郎の身体が痙攣し、上げる声も女のように色っぽい。赤子のように突起に吸い付き、硬くした舌で中心を何度も撥ねると、それにつれて炭治郎の身体も跳ねる。

（感じやすすぎるんだよな・・・このまま続けたら、また昨日みたいに・・・）

胸で絶頂するなど、話には聞いていたが、それを体験するのは女性で、男が達するなんて聞いたこともない。しかし、炭治郎は昨日確かに達していたし、演技をするような余裕もなかった。

（一体なにされたんだよ）

自分が病院で薬が不味い、と嘆いている最中、炭治郎はどんなひどいことをされたんだろう。複数の男の手にかかって凌辱されたのは想像できるが、ここまであの炭治郎が情欲に狂ってしまうようになるなど、尋常な事ではない。

何をされたか詳しく聞きたいが、たぶん炭治郎は話さないだろう。そう思うと、全てを知っている風だった冨岡という男が憎らしくなってくる。

「んっ・・・んんっ・・・！あ、あっぁ・・・！」

夢中で舌を動かしていると、炭治郎の身体が緊張したかと思うと、次には大きく痙攣し、艶にまみれた吐息をついた。それから体中の力を抜いて仰け反っていた背中をベッドに落とし、はぁはぁと荒い息を吐いている。

（胸でまたイッたんだ・・・）

気が付くと布団の中の熱気がこれ以上ないほど上昇している。
いい加減いちいち換気するのが鬱陶しくなって、善逸は布団から顔を出し、月あかりの下で炭治郎と向かい合った。

「炭治郎・・・」

思わず名前を呼んだが、欲情で喉がつまってかすれた声しか出ない。
胸で絶頂したばかりの炭治郎の色香が凄まじい。昼間の明朗快活な少年とは同一人物とは思えない。
可愛くてたまらなくて、額の汗を犬のように舐める。ん、ん、と炭治郎は可愛い声をあげて抵抗するように頭を動かすが、それは男の情欲を煽るだけだとは本人はわかっていない。
炭治郎の両腕を押さえつけていた手を離し、そのまま下腹へと滑らせ、ズボンに手をかける。

「っ・・・！ほんとに、だめだっ・・・！」

炭治郎がとっさにズボンを掴んで善逸とは逆の方向へ引っ張る。

このままでは布が破れてしまう。

「ごめんっ・・・！炭治郎、俺もう、我慢できない・・・！」

※中略※

「はぁ、はぁ、は・・・」

「炭治郎の方が先にイッたから、俺の勝ちだね・・・」

そう言って善逸が身体の向きを変えて、炭治郎の顔に向き直る。
布団から顔を出して互いの顔を見るが、善逸は達精した直後の炭治郎の色香に、炭治郎は頭から獲物を食おうとする獣欲を抱えた、雄の顔をした善逸と見合った。

（こ、このまま昨日のように犯されてしまうのか？）

そう思うと、炭治郎の中に植え込まれた被虐の愉悦がざわめき、心臓が切なく高鳴ってくる。善逸に聞こえるとまた上げ足をとられてしまう、と炭治郎は焦って心音を正そうとするが、絶頂直後と極度の興奮のせいで自分を律することすらできない。

「ち、違う、善逸、俺は、こんなことっ・・・望んで・・・」

「ほんと嘘が下手だよね、炭治郎・・・」

低い声で囁かれ、善逸の手が炭治郎の胸を滑り、桜色にかかる。秘孔の愛撫が中途半端で身体全体が性感帯になっている炭治郎には、悶えずにはいられない愉悦がそこへ走る。

「う、嘘じゃない・・・っ」

顔を朱く染めて、はぁはぁと艶にまみれた吐息をつく炭治郎の首元に何度も口づけ、善逸は耳を舐めながら言った。

「俺勝ったよね。お前は完全に負け。だから、抱くよ?」

「んうぅっ、あっ、はぁ、ひ、卑怯だった・・・」

半分情欲に侵食された声で炭治郎は抗議の声を上げるが、善逸は頓着しない。
布団の中は温室のように暑くなり、互いの体液でぬるぬるになっている。しかし善逸はその感覚と炭治郎の音がなんだか気持ちいい。

怯えている音と、戸惑う音、快楽に高揚している音、この先の快楽を期待して高まっている音がたまらない。

「でも俺より先にイッちゃった炭治郎が悪いよね？お前も抱かれるの嫌じゃないんだろ？」

「・・・・・」

善逸の問いに炭治郎は反論せず、ただ目を背けた。紅くなった頬と濡れ光る唇が艶めかしい。たまらなくなって善逸はその唇に自分の口を押し当て、舌を挿し込んで思う様蹂躙する。
ん、むぐっ・・・と炭治郎の戸惑いとも愉悦ともとれる音が聞こえてくるが、自分の心臓の音の方が大きくなってきて、善逸は炭治郎を探れない。
熱気を籠らせた布団をどけてベッドの足元へと追いやると、月明かりで快楽の熱に浮かれた炭治郎の艶姿が浮かび上がる。
昼間の太陽のように明るい少年とはまるで違う。これが同じ昼間の炭治郎とは信じられない。
しかし善逸の身体は我慢できないほどに暴走し始め、妖艶と化した炭治郎の大腿を掴むと、その間に腰を滑り込ませて屹立を秘孔に当てる。

「んんっ！」

指とは違って熱く、雄の脈動が感じられる肉棒を押し当てられ、炭治郎の中に嫌と言うほど思い知らされた雌の快感がせり上がってくる。

「ぜ・・・善逸、ほんと、ほんとにだめだ・・・」

途中で愛撫を投げられ、身体中を触られて、善逸の淫気に当てられた炭治郎は、このまま犯されてしまえば自制が効かなくなりそうで、怖い。
そんな炭治郎の胸板に寄り添って、善逸が軽く口づけをしてくる。

「大丈夫、乱暴にしないから・・・」

たぶん・・・と思いながら、善逸は腰を進めて炭治郎の中に挿ってゆく。

「――――――っ！んんっ！」

異物感の激感に耐え、炭治郎が声を出すまいと必死に口を引き結んでいる。未だに伊之助に聞こえてしまうと健気に思っているらしく、身も世もなく乱れる様も美しいが、耐える炭治郎の姿もそそる。

これまで指で入口しか触れられていなかった部分に男が挿り、身体中が歓喜する。肌からは甘い汗が流れ、頭の中は陶酔の痺れで真っ白になってしまう。

（こ、こんなに、感じ・・・！）

まだ完全に挿入されたわけではないのに、それだけで炭治郎の雛先から溢れるほどの淫液が零れ始め、股座を濡らしくゆく。
そのまま更に奥へと侵入され、昨日意識が遠くなるほど突かれた性感帯にかかる。

（善逸、昨日より大きくなってないか？）

挿入されたときに違和感を覚えたが、無理矢理こじ開けられる被虐感が増している。昨日は丁度善逸の先端が当たる部分に、中で最も感じる性感帯が当たり、これ以上ないほどに突かれて何度も達したが、今日はその部分を通って余りある。
さらに奥へ侵入される圧迫感と充足感に、炭治郎の身体が甘美で痙攣し、上半身を激しく仰け反らせる。

「あぁぁぁああっ・・・！ぜん、いつ、もっと、ゆっくり・・・」

連日の薬の効果で善逸の身体は元に戻りつつあるのだ。その自分の身体の変化に一番気づいていないのは本人らしく、皮肉にも炭治郎をさらに喘がせる不思議がわかっていない。

※中略※

・・・・・」

（身体を触られている・・・？）

寝入っていた炭治郎だったが、身体を這い回る大きな手の感触で気が付いた。

（誰だろう？）

ぼんやりと目を開けると、目の前に善逸の顔があった。が、目は閉じられている。

（善逸、寝ぼけているのか？）

そう思った炭治郎は、善逸の頭に触れようとして両手の違和感にようやく気付いた。

「あれっ」

両手首に療養着らしい布が絡まって、ベッドの柵に括りつけられている。見てみると、善逸は上裸だ。自分の服を使って炭治郎の両手を拘束したらしい。

（一体なんでこんなことを・・・）

力を込めても今の炭治郎では、布を破いて抜け出すことができない。善逸の意図がわからない炭治郎は焦って声をかけるが、そもそも、目の前の善逸からは、いつもの善逸とは違う匂いがしている。

「ぜ、善逸、どうしたんだ・・・普通じゃないぞ、善逸・・・」

すると善逸は急に炭治郎の顔に覆いかぶさって、その唇を食むように塞いだ。

「んぐっ！」

これまでの情交で口づけは何度かされたが、こんな荒々しいのは初めてだ。口腔に舌を挿れてくるが、炭治郎の息継ぎなどお構いなしに中を荒しまわり、口の中を何度も吸い上げ、ひっこむ炭治郎の舌を引き出して噛み、先端をくすぐってくる。

「んんっ！んっ！んんんっ！」

ぞくぞくと首の後ろに悦熱が走り、炭治郎は善逸を拒絶しようとしたが、両手は上にまとめて括りあげられている。
両腕がビシっと引っ張られる感覚に一瞬苛立ちを覚えたが、善逸が激しく口づけをしながら炭治郎の上の療養着を一気に左右に開いた。ボタンがはじけ飛んで、乾いた床にコロコロと円を書いて転がってゆく音を聞きながら、炭治郎は頭の血の引く感触を感じていた。

（どうしたんだ善逸？）

しかし手荒い口づけを何度も施されながら、善逸の両手は炭治郎の上半身をスルスルと撫で回してくる。口づけで欲情に火がついてしまった炭治郎の身体は、その感覚に素直に反応し、肌を震わせて快感に呼び込まれてしまう。

「ふっ・・・ぐぅぅっ・・・！」

口を離されたが、互いの粘質な唾液がつながって、一本の糸になっている。善逸はそれをさらに舐め撮って再び炭治郎に激しい口づけを仕掛けてきたが、首を逸らせて善逸から逃れようとして、今度は首元を食まれた。

「あっ・・・・！」

炭治郎は首が弱い。総じていえば全身が弱くなっている今だが、平素でも首や耳は性感帯だ。その首には妖者たちが狙って何度も噛みつき、吸い付いた跡が無数に残っているのが証拠である。

「ちょ、善い・・・つっ・・・・！」

首と肩を狭めて善逸の頭を挟み、追い出そうとするが、炭治郎の喉元に食らいつきながら歯を滑らせて、挟み撃ちから逃げる。そのせいで首を半周愛撫され、炭治郎は首から上を快楽に痺れさせて声を上げた。

「うあっ・・・・！」

ぞくぞく、と快感が首の後ろから背中まで伝い、炭治郎の裸の上半身を撫で回す善逸の手の感覚にも連動して、身体中が甘く痺れてしまう。

（んんんっ・・・！本当に、何のつもりだ？）

情交ならさきほどしたばかりだし、善逸がもう一度と言えば、炭治郎も折れないことはない。なのに、自分を拘束して、まるで犯すようなやり方で乱暴にするなど、両者にとって得はない気がする。
しかし善逸の様子が明らかにおかしい。
いつもと違って善逸特有の明るさがなくなって極めて強い真剣さが漂い、ピンと張りつめた匂いがする。なにより、炭治郎が抱かれる時に相手からする正体不明のあの匂いが、かなり強く漂っているのだ。
それに、善逸の手が大きくなっている。蜘蛛の毒で子供のように小さくなったと言うのに、今、炭治郎の肌の上を這い回る手の感触は、元の大きさと遜色ないほどだった。

（急に戻って、おかしくなったのか？）

善逸の奇行が理解できない炭治郎には、これぐらいしか思い当たることはない。善逸はまるで夢遊病かのように、眠りながら自分を暴きに来ている。それならば、起こせばいいだけの話だ。
善逸には悪いが、ここは頭突きで目を覚ましてらおう。炭治郎の身体からはすでに欲情の淫熱が渦巻いてきているが、何度も親友に間違いを犯させるわけにはいかない。

（善逸）

「ごめんっ！」

力いっぱい、勢いをつけて額を打ち付けた。はずだったが、この距離で躱されてしまった。
炭治郎は一瞬驚愕したが、二発、三発と打ち続けるも、善逸は全部綺麗に躱す。さらに、躱した先にある首筋に舌や歯を這わせる余裕まで見せて、その俊敏さに炭治郎も戸惑いを隠せなかった。

（動き、全部見切られてる・・・？）

平素の善逸では考えられない俊敏な動きと判断に、炭治郎は当惑する。その隙に耳に噛みつかれて、炭治郎は走る痛みに歯を食いしばる。

「いっ・・・！」

しかし大声は出せない。二つとなりのベッドでは伊之助が寝ている。

イノシシの被り物をしているせいで、目をつぶっているかどうかは確認できないが、起きずに眠っていてほしい。意気消沈しているため、今は起きていても寝ているように見える伊之助だが、二人でこんなやましいことをしていると知られて軽蔑などされたくない。

「善逸、やめろ、いい加減にしろ・・・」

コソコソ声で善逸に言い聞かせるが、目は閉じられたままで全く反応がない。それなのに、炭治郎の身体には愛撫を欠かさず、身体の芯へどんどん淫欲を流し込んでくる。
噛みつかれて痛みが走った耳だったが、舐め治すように執拗に舐めまわされ、首筋に快感の電流が流れっぱなしにさせられる。
炭治郎がいつもつけている耳飾りがカラカラと音を立てるが、そんな音程度では善逸の目は覚めない。

「あっ・・・！」

上半身を撫で回していた善逸の掌が桜色にかかり、思わず炭治郎は声をあげてしまう。しまった、と思ったが、寝ている善逸はその箇所を再び探り当て、今度は指を絡め始めてくる。
善逸の指を意識した瞬間、それがいけなかったのか、急激に桜色に熱がこもって敏感になり、止まらない愉悦に炭治郎は背中を弓なりに反らせた。

「あぁぁっ・・・！」

思わず口から艶声が出てしまい、一瞬伊之助を起こしたかとぞっとしたが、善逸が何度もそこを爪で弾いてくるので、周囲に気を回す余裕がなくなった。

（んんっ！そこは辛い・・・っ！）

妖者たちの凌辱で、ここでも快感を極められるようになってしまっている炭治郎の胸の桜色は、淫熱に疼く身体の上では、最も感じる器官の一つと言ってよいほど、敏感だ。
無理矢理口づけをされ首を舐められ耳を食まれ、首から上は善逸の舌と唇が這いまわっていない場所などないかのように激しく責められた。その感覚は確実に炭治郎の性感の芯に届いていて、身体が隠しようもないほど熱くなってしまっている。
しかし炭治郎の身体など知る由もなく、善逸は目を閉じたままで炭治郎の桜色を親指と人差し指の間に挟み、擦り潰すように擦り立ててくる。

「あっ！んん、んんっ・・・！」

善逸に胸を触られているのを意識しなければよかったと言うのに、自分の喘ぐ声で快感を知ってしまったのがいけなかった。愉悦を知った身体は快感が増大して、男として忌むべき胸の絶頂に差し掛かろうとしてしまう。

「ぜ、ぜんいっ・・・」

息も絶え絶えに絶頂へ上る愉悦を感じている炭治郎に向き直り、善逸は下唇から鼻まで覆うほどの大口を開けて炭治郎の顔を貪った。

（い、息ができないっ・・・！）

その間にも善逸の指は桜色を弄び、暗がりの中でもう一方の尖った桜色も摘み当てられ、快感が倍増してしまう。
酸欠状態と総毛立つほどの愉悦で混乱し、炭治郎は快楽を拒否できなくなっている。善逸を止めたいが、両手は上でくくられ、やられたい放題だ。

（そ、そこグリグリするなっ・・・！ぞくっとして、とまらない・・・！）

感じすぎて炭治郎の赤銅色の瞳が潤んでくる。声を出したいが、伊之助に聞こえるのが嫌で出すこともできない。ただ、一方的に与えられる快楽を感じるしかできない。
ガリ、と爪で桜色を引っ掻かれ、背中に甘美な痺れが走る。一瞬意識が飛ぶような高揚感が湧き上がり、炭治郎は焦ったが、快感を散らす行動もできず、何度も引っ掻かれて激感を堪えなければならなかった。

（こ、これダメだ、何も考えられ・・・また胸に、熱が集まって・・・！）

胸の絶頂があと少しで迫る中、善逸に爪で挟まれ、そのまま擦りつけられて、とうとう快感が弾けた。

「――――――っ！」

布に熱湯がしみ込むように、じわあ・・・と耐えがたい快感が広がり、炭治郎は自由にされている両足をばたつかせて快感を散らそうとする。こんなもの、まともに受けては頭がどうにかしてしまう。それほど、今度の胸の達悦は凄まじかった。

「は、はぁ、はぁ、はあ・・・」

たった一度胸で達しただけで、炭治郎の身体は汗まみれになり、身体をぐったりと弛緩させる。しかし善逸の動きは止まらない。
相変わらず炭治郎の顔を舐め回し、食み、荒々しく口づけて首に噛みついてくる。
全身を敏感にする胸の快感が極まったばかりで、炭治郎の身体は淫欲まみれになっていた。快感の余韻に身震いしている中、善逸の手が炭治郎のズボンの中へと入りこんでゆく。

「あっ・・・だ、だめだ、そこはだめだっ・・・！」

胸の絶頂だけですでに濡れてしまったそこに触れられ、それだけで愉悦に下半身が痺れてしまう。情交のあとで下履きも濡れて気持ちが悪かったので、炭治郎は下はなにも履いていない。むき出しの雛先を掌で掴まれ、締め付けられる快感にぐっと息が詰まる。
善逸の手はさきほどまで子供のようだったのに、今は前と変わらない大きさになっている。心なしか、身体の大きさも元に戻り、いつもの善逸と変わらない鍛えられた少年の体躯に戻っていた。

（急に治ったから、頭がおかしく・・・？）

続きはＤＬ販売でお楽しみください